

鳥取市立保育所における童謡に関する実践
— 《兎のダンス》を事例として—

村上 沙樹・鈴木 慎一郎

Practice of Children's Song at Tottori Municipal Day Nursery
: A Case Study on "Usaginodansu"

MURAKAMI Saki, SUZUKI Shinichiro

地域学論集（鳥取大学地域学部紀要） 第14巻 第3号 抜刷

REGIONAL STUDIES (TOTTORI UNIVERSITY JOURNAL OF THE FACULTY OF REGIONAL SCIENCES) Vol.14 / No.3

平成30年3月26日発行 March 26, 2018

鳥取市立保育所における童謡に関する実践

— 《兎のダンス》を事例として—

村上沙樹*・鈴木慎一朗**

Practice of Children's Song at Tottori Municipal Day Nursery:
A Case Study on "Usaginodansu"

MURAKAMI Saki, SUZUKI Shinichiro

キーワード：保育所，童謡，《兎のダンス》，絵本，着ぐるみ

Key words: Day Nursery, Children's Song, "Usaginodansu", Picture Book, Stuffed Animal

はじめに

幼児教育においては日々多くの歌が歌われている。わらべうたなどの古くから歌い継がれてきた歌をはじめ、今日では、テレビアニメの主題歌が取り入れられることもしばしばである。筆者の村上が鳥取市内の保育所で保育実習を行った際、子どもたちはその時流行りのテレビアニメの主題歌や映画の歌を好み、自然と口ずさんでいる姿が見られる半面、古くから歌い継がれてきた歌が積極的に歌われている様子はあまり見受けられなかった。服部は次のように指摘する¹。

世の中に童謡が流れなくなって久しい。もちろん子どもは歌わなくなったし、テレビでもほとんど放送されず、幼稚園や保育園の先生もあまり日本の名作童謡を教えようとしな。子どもたちはテレビドラマの主題歌やコマーシャルソングの一節を歌っている。

「童謡」は、広義ではわらべうたから現代のテレビ番組などで流れる子ども向けの歌を含む子どもの歌全体を指し、狭義では大正期の童謡運動で生み出された子どもの歌を意味する²。本稿では「童謡」を狭義の意味で捉える。「童謡運動」とは、1918（大正7）年、児童文芸雑誌『赤い鳥』の創刊と、翌年発行の『赤い鳥』5月号において《かなりや》（西条八十作詞，成田為三作曲）の掲載を始まりとして、学校唱歌とは別の理念のもと、新しい子どもの歌の創作と普及を展開された運動である。童謡運動に携わった作曲家として、本居長世（1885-1945）、山田耕筰（1886-1965）、中山晋平（1887-1952）、弘田龍太郎（1892-1952）、成田為三（1893-1945）、草川信（1893-1948）梁田貞（1885-1959）らが挙げられる³。

童謡には、子どもの生活や遊びが描かれ、今日においても歌い継いでいきたい名曲が多い。しかしながら、普段接する機会が減っているため、子どもにとっても保育者にとっても馴染みが薄い。また、穏やかな曲調であることが多いため、アップテンポの曲に親しんでいる人にとって少し物足

* 四国中央市福祉部こども課 寒川保育園

** 鳥取大学地域学部地域学科人間形成コース

りなさを感じる側面もあると予想される。そこで本稿では、鳥取市立保育所における童謡の実践の状況を調査⁴した結果を踏まえ、子どもの表現意欲を喚起できる童謡の実践における援助方法を開発、実践し、その有効性を検証することを目的とする。

幼児教育における歌唱に関する研究は多々ある中⁵、童謡に焦点を当てた実践研究となると、乙部⁶と岡山・立本⁷に限定される。しかしながらこれらは童謡という言葉が使われてはいるものの、広義の意味で使用され、大正期の童謡を対象としたものではない。そこで本稿では、童謡に関する教材、援助方法の開発後に保育所での実践研究を行い、その有効性を検証したい。

研究方法は、保育所における童謡の実践を立案し、実際に筆者による実践を行い、質的・量的の両側面から分析・考察を行う。

1. 童謡実践の事前準備

鳥取市立賀露保育園の協力を得て、2016（平成28）年度において事前観察調査、実践研究の事前準備、そして実践研究へと展開する。対象となる子どもの実態把握とそれに伴った教材や援助方法の開発を行い、実際に実践することで開発した教材や援助方法の有効性を検証していく。

本研究の遂行にあたって、事前に鳥取市立賀露保育園に調査目的を説明し、調査実施への許可を書面で得た。事例の記述については、対象となる個人を記号で表し特定されないようにし、倫理的配慮を行っている。

事前観察調査から実践研究2日目までのスケジュールは以下の通りである（表1）。

表1 観察調査から実践までのスケジュール

日付	内容
9月29日（水）	観察調査（参与観察）
9月30日（木）	観察調査（参与観察）
11月9日（水）	観察調査（参与観察）
11月9日（水）～21日（火）	指導案作成
11月22日（火）	賀露保育園にて指導案指導
11月24日（木）	賀露保育園にて指導案指導
11月1日（木）	ピアノ担当学生と着ぐるみ担当学生と打ち合わせ
11月3日（土）	賀露保育園生活発表会見学
11月24日（木）～6日（火）	歌詞・楽譜・ハチマキ・アンケートの準備
11月5日（月）	ピアノ担当学生と着ぐるみ担当学生と打ち合わせ
11月6日（火）	賀露保育園にて実践1回目・観察調査（参与観察）
11月6日（火）	着ぐるみ担当学生と打ち合わせ
11月7日（水）	賀露保育園にて実践2回目・観察調査（参与観察）

（1）《兎のダンス》

本実践で用いた楽曲は、《兎のダンス》（作詞：野口雨情、作曲：中山晋平）である。選曲の理由として、第一に、鳥取市立保育所を対象とした質問紙調査で「実践したことはないが今後扱ってみたい曲」という質問で1位に入っていた曲であるということから、保育現場で保育者側が取り入れ

たいと考えている楽曲ということが挙げられる。第二に、ハ長調で明るく、リズムも軽快であるため子どもが初めて聴いても楽しい雰囲気がすぐわかるような楽曲であるということも挙げられる。第三に、大正期の楽曲でありながら現代の子どもたちにも比較的わかりやすい歌詞であるということも理由の一つである。なお計2回の実践で、身体表現なども取り入れるためすぐに覚えて歌えるよう考慮して1番のみの歌唱とした。

ここでは《兎のダンス》の楽曲について1) 音楽的特徴と2) 歌詞の特徴の側面から分析する。

1) 音楽的特徴

《兎のダンス》は、表2の音楽的特徴がみられる。

表2 《兎のダンス》の音楽的特徴

曲名	年	作詞者	備考	調	拍子	音域
兎のダンス	1924 (大正 13 年)	野口雨情	『コドモノクニ』	C	2/4	c ¹ - e ²

《兎のダンス》は前述したように、ハ長調である。旋律を聴くだけでも明るい印象を受ける。拍子は4分の2拍子で、子どもにとっては拍子がとりやすく歌い易さにもつながるだろう。音域は、c¹ - e²となっており⁸、最高音の e²はやや幼児には高い音ではあるが、歌う際には低い音から順々に上がっていくため比較的歌い易いものと考えられる。

《兎のダンス》の音楽的特徴として最初から最後まで旋律は常に同じリズムであるということが挙げられる。そのリズムとは、子どもの曲に使われることの多いピョンコのリズム⁹である。付点8分休符が最初に入っていることで、出だしがズレてしまうと一斉に歌う際リズムが乱れてしまう。しかし、今回5歳児クラスで実践するということから、歌の出だしを揃えて友だちと一緒にピョンコのリズムを楽しんでほしいというねらいもあり、少し出だしが難しいがこの曲を選んだ。このピョンコのリズムが《兎のダンス》の歌詞と非常によく合っている。このリズムを知ることがこの曲をより一層楽しむことにつながると考える。

2) 歌詞の特徴

図1は1924(大正13)年に『コドモノクニ』の《兎のダンス》の歌詞が掲載されたページである。



図1 『コドモノクニ』掲載された兎のダンスの歌詞

出典：鷹見久太郎 編『コドモノクニ』東京社、1924年。

《兎のダンス》の歌詞を見ると、「ソ ソラ ソラ ソラ」や「タラッタ ラッタ ラッタ」のように歌詞に意味のある言葉というよりも旋律のリズムに乗って言葉を当てたような言葉が多いことがわかる。「ラッタ ラッタ」からはピョンコのリズムが歌詞の中からも感じられる。さらに、歌詞のひとまとまりが最初から最後まで7音のまとまりで成り立っていることがこの曲の非常に特徴的な点である。この7音のまとまりからも子どもたちがリズムに乗って歌い易く覚えやすい曲になっていると考えられる。

また、その部分以外では「脚で蹴り蹴り ピョッコピョッコ 踊る」や「耳に鉢巻」のように兎が踊っている様子を具体的に表した歌詞や、兎の身に着けている物が歌詞に入っている。この歌詞を見るだけでも、どのような兎たちが、どのように踊っているのか、簡単な言葉で示されているため幼児期の子どもにもイメージがし易いと考えられる。

さらに、今回は実践が2回のみであり、歌うことを主とするため、歌詞が幼児期の子どもにもすぐに覚えやすいという点も重要な点として挙げられる。

2. 童謡の実践と分析

質問紙調査の結果に加え、観察調査で得られた子どもの実態に合わせて実践方法を立案し、実践を行うことで立案した方法が子どもの歌声にどのような影響を与え、また、表現意欲を喚起することに有効かどうかを検討していく。

(1) 実践の概要

《兎のダンス》の実践は、筆者の村上により以下のように行われた。

- ・実施日 2016(平成28)年12月6日(火) 10:00~10:21・7日(水) 10:00~10:36
- ・実践対象 鳥取市立賀露保育園 5歳児クラス 37名

記録方法はビデオカメラによる記録と、実践の前後での参与観察時のメモの2つである。ビデオカメラ計2台で記録し、1台は保育室後方に三脚で固定し全体及び筆者の村上を主として記録した。もう1台は手持ちで撮影し子どもを主として記録した。

(2) 実践の分析

筆者が行った実践を質的研究と量的研究に分けてそれぞれの援助方法について映像とトランスクリプトをもとに子どもたちの表現意欲を喚起するという点で有効かどうか分析していくこととする。

1) 質的研究

実践の中で取り入れた、絵本、リズム遊び、身体表現、着ぐるみそれぞれに分けてこれらの方法の分析し、それらの教材や援助方法が子どもの歌声にどのような影響を与えたのかを検証していく。

① 絵本による導入

本実践で用いた絵本『うさぎのダンス』¹⁰は、《兎のダンス》を歌う上でウサギやウサギのダンスに関するイメージをクラス全体で共有できるように選んだ。

絵本は事前の観察調査でも明らかになっているように、5歳児クラスの子どもたちは毎日絵本を保育者に呼んでもらっており、自分一人でも絵本を読む子どもが多く身近な物的環境の一つである。

筆者は絵本を背中に隠しながら子どもの前に出たのだが、じっと筆者が持っているものに注目し、「見えた」という子どももおり、初めから集中している様子だった。

表3 絵本『うさぎのダンス』を読んだ時の様子

時間	人物	言動
00:52	T	(『うさぎのダンス』を読む) うさぎのダンス うさぎのダンス 夕焼けの綺麗な帰り道子だぬきのぼんちゃんが歩いているとどこからか楽しそうな笑い声が聞こえてきました あれ?なんだろう?ぼんちゃんが草をかき分けてみると うわあ ウサギたちが楽しそうに踊っていました 僕も一緒にウサギのダンスおどりたいなあ でも僕 タヌキだから入れてくれないかもしれない そうだ 葉っぱを一枚のっけて ハレハレポンポンハレポンポン うさぎさんになあれ ぼん 失敗 お耳がない お耳が長くないね それじゃ今度はこの葉っぱで挑戦 ハレハレポンポンハレポンポン お耳長くなあれ ぼん やった でも尻尾とお顔は元のまんま
02:34	C	もう一回

凡例 T：実践者，C：子ども。

表3の場面では、タヌキのぼんちゃんがウサギになるために様々な葉っぱをのせて変身するもどこかにタヌキのままのところが残って失敗してしまうところを読んだ時の様子である。ぼんちゃんが失敗したのを見て「もう一回」とつぶやいている。ぼんちゃんに感情移入し、お話の中に入り込んでいる様子がわかる。

この1回目の実践の後筆者がこの絵本を保育室の子どもによく見える場所に立てかけておいた。すると、「この絵本読んでもいいですか」と筆者に訪ねてくる子どもが出てきた。その子どもは友だち数人で絵本を見て、少し《兎のダンス》を思い出して口ずさんでいる様子が見られた。これらことから、この絵本の導入は子どもが《兎のダンス》に興味を持ち、さらに、再度絵本を見て歌を思い出して歌いたいという意欲を高めるものであると言える。

② リズム遊びによる音楽的援助

手で主旋律のリズムを叩くことで、ピョンコのリズムを楽しみ、さらに、「せーの、うん」の掛け声で出だしの付点8分休符を意識できるようにというねらいで行った。実際の様子が表4である。

表4 最初の付点8分休符を確認する様子

時間	人物	言動
10:58	C	(手でリズムを叩きながら歌い始めるが出だしがズれる)
10:59	T	ストップ ちょっと 難しいところがあります 実は せーのそそっらそっらそっらではなく せーのーうんそそっら うん をちょっとね 感じてください ちょっと難しいよ でもそらさんだったらたぶんできえると思う
11:23	T	せーのーうんそそっらそっらそっら (手を叩きながら歌いだけ歌う)
11:25	C	(Tをよく見ながら歌いだけ手叩きながら歌う)
11:28	T	うん溜めるで
11:30	C	うん うん

ここではズレた瞬間筆者が手を叩くのをやめるよう促し説明した。視線が一気に筆者に集中し説明を最後まで聞こうとする姿が見られた。また、「せーの、うん」というように、休符の部分を

「うん」と変換し声に出していうことで子どもが説明の後すぐに、「うん、うん」と声を出して入りの練習をする姿が見られた。このことから休符があるのだということが意識できていることがわかる。

さらに実践1回目の最後に歌うときの様子にこの時の援助の効果が表れていることが分かる場面がある。次の表5ある。

表5 1回目の最後にピアノ伴奏に合わせて歌った時の様子

時間	人物	言動
12:52	T	せーのーうん (伴奏を弾きながら歌う)
12:53	C	うん (手でリズムを叩きながら歌う)
12:53	C	(手は叩かず頭や体を揺らしてリズムを感じながら歌う)

筆者がキーボードで伴奏を弾きながら歌っていたため手でリズムを叩いてはいなかったが自分で考えて手を叩く子どもや、手は叩かず頭や体を揺らしてリズムを感じている子どもの様子が見られた。さらに、歌う時にも、筆者と一緒に休符の「うん」も声を出してから歌っており、引き続き休符を意識して歌おうとしていることがわかる。

これらのことから、リズム遊びによる音楽的援助方法は子どもが《兎のダンス》を歌うことに対して自信をつけさらに歌いたいという表現意欲を高める方法であると言える。

③ 身体表現

観察実習で明らかになったように、子どもたちは運動会などの行事で身体表現の中でも特に踊ることの経験を積んできている。これまではクラスでみんな同じ踊りで、保育者が教えた振りをすることはあった。しかし、今回は《兎のダンス》の曲に合わせて自らが感じたように考えたように踊るということにした。実際の様子が表6である。

表6 《兎のダンス》の振りを考えて思い思いに踊る様子

時間	人物	言動
09:34	C	(手を耳にしてびよんびよん跳ぶ)
09:40	C	(友だちと手を繋いで手をゆらゆらさせる)
09:56	T	ちょっと何回も弾いてもらうけんちょっと考えような＝
10:35	C	(友だちと向かい合って跳んで) Sちゃんより私の方が高い
10:41	C	(友だちと手を繋いで円になる)

何回も繰り返し伴奏を弾いてもらっているうちに次第に自分で考えた振りをしてみたり、友だちと一緒に跳んで高さを比べ合ったりして楽しんでいる様子がわかる。

写真1では、実際に子どもたちが考えて踊っている様子である。筆者が友だちと一緒にでもいいと声をかけたためか、中には、数人の子ども同士が手を繋ぎながら輪になって表現して楽しんでいる姿も見られた。



写真1 友だちと一緒に手を繋ぎ踊る様子

また、次の表7は自由に考える時間が終わり、前に出て発表してくれる子どもが踊りを披露した様子である。

表7 CYが前に出て発表する様子

時間	人物	言動
12:12	T	みんな歌ってよ＝ せーのうん
12:13	CY	(リズムに乗って3種類のダンスを入れて自分で考えたものを発表する)
12:13	C	(CYのダンスをよく見ながら元気に歌う)
12:33	T	拍手＝(拍手をする)
12:33	C	(拍手をする)すごーい
12:34	T	すごーい なんか(CYの動きを真似して)こんなんもあつたな＝ すごいね＝ ありがとう

凡例 CY：抽出児。

筆者は実践をするまで、発表者がいたとしても踊りの種類も1種類か2種類程度で、拍に乗って踊ることまでは難しいと想定していた。

しかし、CYは筆者が想定していたよりもしっかりと拍に乗ることができており、踊りの種類も3種類を自分で考えて切り替えており、踊り自体も自分で考えた独自のものを披露していた。そのCYを見ながら歌っていた他の子どもたちは、CYが非常に楽しそうに踊るため歌声もつられて大きくなっていった。歌いながら頭や上半身を縦に揺らして拍を取り始める子どももいた。

これらのことから、身体表現は同時に歌うことは難しい様子だったが、子どもが友だちと一緒に同じ曲を歌い踊りを考えていく中で、歌うことだけでは得られない楽しさを味わうことができ、体全体で表現したいという意欲を高めていると言える。また、発表という機会を設けることで、人前で発表したり発表している友だちを見て歌ったりすることでお互いに影響を与え合い、子どもたちの表現意欲を喚起することに有効であると言える。

④ 着ぐるみ

1回目の実践の最後に「明日は兎のお友だちを連れてきます」と予告しておき、2回目の実践では、1回目で覚えた《兎のダンス》をさらに楽しめるようにと兎の着ぐるみを使用した。着ぐるみの兎には「ミミちゃん」という名前を付け子どもたちが親しみやすいようにした。

ミミちゃんは最初保育室に登場し子どもたちに身体で言いたいことを表現し子どもたちも何を言っているのか一緒に考えて発言していた。その様子が表8である。

表8 ミミちゃんがダンスすることを提案する場面

時間	人物	言動
06:34	M	(ダンスもしたらもっと楽しくなるという動作をする)
06:36	T	(動きに合わせて) 歌って=歌うだけじゃなくて=
06:38	C	(ミミちゃんの動きを見て) 踊る=
06:39	T	おどる?ダンスか!ダンスもしたらもっと なんか楽しくなるかなって
06:45	C	言ってる=
06:46	T	うん 言っとるみたいだな= どう?
06:49	C	(口々に) いいよ=
06:54	T	歌って踊ってみたら楽しいかもしれんな=
06:55	C	先生うさぎの耳? (手を耳に見立ててウサギの真似をする)
06:58	T	あ うさぎの耳こうやってしてもいいかもしれんな=
06:58	M	(子どもの真似をして手で耳を表現してみる)

凡例 M:ミミちゃん(着ぐるみ)。

子どもたちはよくミミちゃんに注目し動きをよく見て何を言っているのか当てようとしていることから、着ぐるみに非常に興味をもっていることが分かる。さらに、ミミちゃんの提案に対して「いいよ」とクラスの半分ほどの子どもたちからこの時すでに声が上がっている。提案の後すぐに兎の耳を手で作って筆者に見せる子どももおり、着ぐるみが子どもの表現意欲を喚起している。

ミミちゃんは初めは半分くらいの子どものみで、中に人が入っているのではないかと半信半疑の状態で、最初保育室からミミちゃんが退出するときには、「髪が見えた」という声も聞かれた。しかし、ミミちゃんがアンコールして歌って踊った後すぐに今度は子どもたちからアンコールの声が上がった(表9)。

表9 遊戯室で2回目が終わった後子どもたちからアンコールする様子

時間	人物	言動
22:40	C	(曲が終わって) アンコール
22:50	C	(徐々に人数が増えて) アンコール アンコール アンコール アンコール アンコール アンコール
22:58	T	しー
23:00	C	(静かになる)
23:02	T	ミミちゃんミミちゃん みんながアンコールって言ってくれたけど どう?
23:11	M	(片手を高く上げてもう1回やりたいということを伝える)
23:25	T	ミミちゃんやりたいって言っとるで=
23:17	C	(一斉に大きな声で) いえーい

子どもたちだけで踊るときよりも、ミミちゃんが入ってからの方が回を追うごとに盛り上がりを見せついに子どもたちからアンコールの声が出た。ミミちゃんからもう1度やりたいということが伝えられると非常に嬉しそうにする様子も見られ、友だちと一緒に楽しいが、ミミちゃんも一緒だとさらに楽しいと感じた子どもが多かったのではないかと推測する。

半信半疑だった子どもたちも人間が入っているのではないかとという疑惑よりも、楽しいという気

持ちの方が強くなったのか、最後のアンケートの時には筆者なしで子どもたちとミミちゃんのでやり取りする様子が見られた（表 10）。

表 10 子どもとミミちゃんだけでやり取りする様子

時間	人物	言動
26:55	C	先生ミミちゃんがなんか言っとる＝
27:02	C	楽しかったって言ってるぞ
27:05	C	ミミちゃん 楽しかった？
27:07	M	(問いかげに対して大きく頷く)
27:07	C	うんだって＝
27:11	C	ミミちゃん楽しくなかった？
27:14	M	(問いかげに対して首を横に振る)
27:14	C	ううんだって
27:15	C	楽しかったんだって
27:16	C	普通だった？
27:19	M	腰から横に振る
27:19	C	ううんだって
27:21	C	すごい楽しかったって
27:22	C	すごい楽しかった？
27:24	M	(ぴょんぴょんして楽しかったことを伝える)

これは筆者がアンケートに使う白いカードを子どもたちに配っていて、前に立っているのがミミちゃんだけだった時である。子どもからミミちゃんに楽しかったかどうか質問し、ミミちゃんはそれに対してジェスチャーで答える。それを子どもたちが「うん」か「ううん」に解釈し次の質問が出てくる。友だちが質問してミミちゃんがきちんと答えてくれる様子を見て自分もミミちゃんの答えを解釈して一緒に会話している気分を味わっている様子だった。

さらに、筆者が予備の白いカードを取りに1分弱退出していた間、ピアノ担当学生に伴奏を弾いてもらいミミちゃんには踊ってもらうようにしていた。すると、非常にきれいな歌声が記録に残っていた（表 11）。

表 11 筆者を待つ間ミミちゃんを見ながら歌う様子

時間	人物	言動
27:28	P	(伴奏を弾き始める)
27:33	C	(踊るミミちゃんを見ながらピアノに合わせて綺麗な声で歌う)
27:35	M	(ピアノに合わせてその場で踊る)
27:50	C	(歌い終わって拍手しながら) すごい かわいい
27:53	P	(もう一度ピアノ伴奏を弾き始める)
28:00	C	(歌いながら手拍子をしたり座ったまま振りをつけたりする)
28:00	M	(ピアノに合わせてもう1回踊る)

ピアノ伴奏が鳴っただけで子どもたち自らが歌い始め、前で踊るミミちゃんを見ながらきれいな歌声で歌い切った。さらに、2回目は座ったままミミちゃんの真似をしたり手拍子をしたりしながら楽しく綺麗な歌声で歌う様子が見られた（写真2）。



写真2 子どもが着ぐるみを見ながら自発的に歌う様子

1回目と2回目で何度も歌いこむことができていたこともあるが、子どもの視線がミミちゃんに集中し、落ち着いているが楽しく歌うことができていた。これは着ぐるみの効果も非常に大きいと言える。

以上から表12では、1回目と2回目の実践の中で①～④の手立てや事前準備で用意した教材などが子どもたちの歌声にどの場面でどのように影響し変化したのかを一覧にした。

表12 歌声の変化

歌った回数	教材・援助方法	場面	歌声・様子
0	絵本, 楽譜	絵本を読みそこから《兎のダンス》の紹介をした場面(実践1回目)	絵本に集中し楽しむ。《兎のダンス》の楽譜を見せるとすぐに曲名を声に出し興味を持っている様子。
1	歌詞	歌詞を前に貼りだした時(実践1回目)	筆者に続いて歌詞をよく読みながら探り探り歌う。
2	掛け声	出だしの掛け声だけ伝えてピアノ伴奏に合わせた時(実践1回目)	伴奏に合わせて歌詞をよく見て探り探り歌うが出だしが揃わない。
3	リズム遊び, 掛け声	出だしのタイミングを確認してすぐ手を叩きながら(実践1回目)	筆者と一緒に「うん」と言うことによって手も歌も出だしのタイミングが揃う。
4	リズム遊び, 掛け声	最後にピアノ伴奏に合わせて歌った時(実践1回目)	出だしのタイミングが揃い最初に比べてゆっくりだがタツカのリズムを表現して歌う。
5	着ぐるみ	立ってピアノ伴奏に合わせて歌った時、この時ミミちゃんが聞いていることを伝えている(実践2回目)	声が昨日よりよく出るようになり足や体全体で拍を取りながら歌う。
6	身体表現	振りを考えて踊りながら歌った時(実践2回目)	踊ることに集中し出だしとらったらったの歌詞以外の歌声は出にくい様子。
7・8	身体表現	友だちが前に出て踊りを発表する時(実践2回目)	友だちをよく見ながら座ったままだが揃っていて綺麗な歌

			声が出る。
9	身体表現	発表の後すぐ全員で踊りながら歌った時（実践2回目）	楽しく踊りながらも6回目の時よりも声がよく出るようになる。
10	着ぐるみ	遊戯室に移動しながら歌った時（実践2回目）	歌詞も覚えて自信をもって元気よく歌う。スキップしながら歌う子どもも見られる。
11	身体表現, 着ぐるみ	ミミちゃんと遊戯室で歌いながら踊った時（実践2回目）	保育室の時よりも動きが大きくなる分声が出にくくなっている様子。
12	身体表現, 着ぐるみ	ミミちゃんのアンコールで歌いながら踊った時（実践2回目）	11回目よりも気持ちが盛り上がり声も自然と出てくるようになっている。
13	身体表現, 着ぐるみ	子どもたちからのアンコールで歌って踊った時（実践2回目）	歌声より気持ちが高まり動きが大きくなり歌声が出にくい様子
14	着ぐるみ	筆者が少し退出している間ピアノに合わせて歌った時（実践2回目）	座ってミミちゃんのダンスを見ながら声を揃えてピョンコのリズムを意識して歌う。筆者の掛け声がなかったため入りはズレる。
15	着ぐるみ	筆者が少し退出している間ピアノに合わせて歌った時2回目（実践2回目）	筆者の入りの掛け声はなかったが子どもたち自身で入りも声を合わせて歌う。ミミちゃんのダンスを見ながら楽しそうにリズムに乗って歌う。

1回目の実践の中では初めて歌う歌ということから歌詞を見ながら探り探り歌う様子が目立つ。しかし、1回目の後半でリズム遊びを交えて出だしのタイミングを確認した後は、タイミングが揃い徐々に自信が付いてきている様子が見られた。

2回目の実践では最初から自信をもって歌えている子どもがほとんどであった。それは1回目の実践の後も歌詞を保育室の壁に貼っていたことで、子どもたちが思い出して自分たちで歌っていたことも大きな原因と言えるだろう。踊りが一緒になるとどうしても声がきれいにしにくくなってしまうが、遊戯室に移動する際もスキップしながら明るい声で歌ったり、最後に筆者の掛け声なしでピアノの伴奏だけで歌えるようになっていたり歌うことも十分にできていたのではないかと考える。

2) 量的研究

量的研究として今回の実践の中で行った子どもたちへのアンケートを分析していくこととする。

1回目の実践でも2回目の実践でも、活動の最後に「今回の活動が楽しかったかどうか」を問い、「とても楽しかった」「ちょっと楽しかった」「あまり楽しくなかった」の3つの選択肢の中から選んで、選んだ回答の箱に白いカードを入れてもらった。このアンケートと前述した質的研究を合わせて教材や援助方法の有効性を検証していく。

1回目のアンケートは以下の通り行った。

- ・日時：2016（平成28）年12月6日（火）
- ・対象：そら組（5歳児クラス）の36人（欠席者1人）

図2は1回目の実践に対する感想を聞いた結果である。

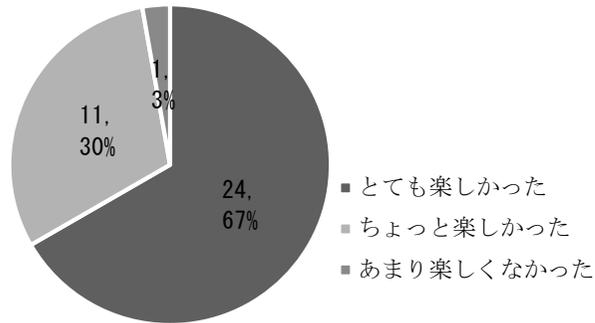


図2 1回目の感想

図2から、1回目の実践では36人中24人がとても楽しかったと回答した。これは全体の67%である。36人中11人はちょっと楽しかったと回答した。これは全体の11%である。36人中1人があまり楽しなかったと回答した。これは全体の1%である。

2回目のアンケートは以下の通り行った。

- ・日時：2016（平成28）年12月7日（水）
- ・対象：そら組（5歳児クラス）の37人

図3は、2回目の実践の感想を聞いた結果である。

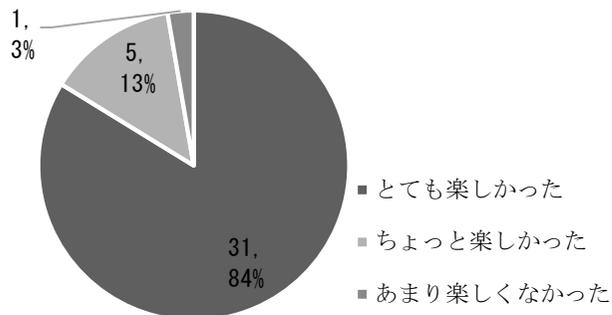


図3 2回目の感想

図3から、2回目の実践では37人中31人がとても楽しかったと回答した。これは全体の84%である。また、37人中5人がちょっと楽しかったと回答した。これは全体の13%である。37人中1人があまり楽しくなかったと回答した。これは全体の1%である。

1回目の実践の感想聞いた結果と2回目の実践の感想を聞いた結果では、「とても楽しかった」が1回目は67%だったが、2回目は84%と大幅に上がっていた。逆に「ちょっと楽しかった」は1回目は30%で、2回目は13%で大幅に下がる結果となった。これは2回目の実践では、1回目の実践で「ちょっと楽しかった」と回答した子どもも2回目では「とても楽しかった」と回答した子どもが少なからずいるということがわかる。「あまり楽しくなかった」と回答した子どもは、記録したビデオと筆者の観察から、1回目の実践では欠席しており《兎のダンス》を歌うことが2回目の実践の時は初めてだったことがわかった。指導案を欠席者がいることを想定して作成できていなかった点と当日、その子どもに配慮した流れや援助までできなかつたことが大きな要因であると考えられる。

しかし、全体的に結果を見てみると1回目よりも2回目の実践の方が子どもたちは楽しいと感じていたことが明らかになった。

おわりに

子どもたちの表現意欲を喚起する教材、援助方法の開発として、絵本、リズム遊び、身体表現、着ぐるみを挙げ、準備、実践、分析をしてきた。絵本は最初の導入として、兎のダンスに対する興味を高めるため取り入れた。子どもたちは集中して最後まで聞いており、1回目の実践の後も絵本を保育室に置いておくと自分で読みたいという子どもが出てきた。絵本と共に《兎のダンス》も思い出して歌えるようにとあえて同じタイトルの絵本を選んだのは有効だったと言えるだろう。

音楽的援助方法として、《兎のダンス》の難しさの要因となっている最初の付点8分休符を意識できるように、掛け声を「せーの」ではなく「せーの、うん」と、休符の部分も声に出して言うことにした。この援助方法とリズムを手で叩くというリズム遊びも一緒に取り入れることで、子どもたちは最初の付点8分休符とピョンコのリズムを意識できるようになったと言える。さらに、その直後に歌う時、筆者が「せーの、うん」と声をかけると、子どもも一緒に「うん」と休符の部分を声に出して意識し、出だしが全体的に揃うようになった。このことからこれらの援助方法が有効だったと言える。

身体表現は実践の中では、非常に活発に子ども自ら考えた表現ができていた。そのきっかけとして、着ぐるみのミミちゃんが子どもたちに「歌うだけじゃなくて踊ったらもっと楽しくなるんじゃないかな」というきっかけとなる言葉をかけている。この言葉によって子どもたちは身体表現活動をする必然性を見出し、積極的に活動できたのではないかと考える。表現意欲を引き出すという点で見ると身体表現活動と着ぐるみを取り入れたことは有効だったと言える。

しかし、歌うということに注目してみるとどうしても身体表現が激しくなり、歌声まで意識するということが難しいという結果が2回目の実践で明らかになった。ただし、今回のように、歌うことを主とした実践を先にしておくことで、歌を知った上で身体表現を取り入れることにより、その曲にさらに興味を持つことにつながることもある。

着ぐるみは前述した、身体表現のきっかけになる存在としても有効であったが、歌う上でも有効だったと言える。実践2回目のアンケートの前に筆者が退出した場面で、ピアノに合わせて咄囃に

着ぐるみのミミちゃんが踊り始めた。これを子どもたちは座ってただ見ているだけではなく、ミミちゃんの踊りを見つめながら声を揃えて子どもたちが歌い始めた。もちろん、ミミちゃんは着ぐるみのため声を出すことはできない。さらに、筆者も誰も掛け声をかけたり「歌うよ」と促したりすることもなかったが、踊っているミミちゃんを見て自然と子どもが歌い始めたのだ。中には座ったままだが、ミミちゃんの動きを真似しながら歌う子どももおり、歌声も非常にきれいで、大きすぎず小さすぎない声量であった。このことから、着ぐるみは子どもたちから「歌う」ということへの意欲を引き出したのだと考えられ、表現意欲を喚起したという点で有効だったと言える。

さらに、量的研究として子どもたちへのカードを箱に入れる形式のアンケートで子どもたちから実践についての感想を1回目と2回目とで分けて聞いた。1回目の実践ではどの子どもも《兎のダンス》を歌うのが初めてということから、歌うことを主とした活動だった。この1回目の実践の感想として最も多い回答が「とても楽しかった」だったが票数は全体の67%にとどまった。2回目の実践では、1回目で歌を覚えた子どもたちが着ぐるみのミミちゃんと交流し身体表現と歌唱を合わせた活動だった。2回目の実践の感想として最も多い回答は1回目と同じく「とても楽しかった」だった。しかし、票数は全体の84%を占めており、1回目よりも2回目の活動の方がより多くの子どもが「とても楽しかった」と感じていることが明らかになった。

今回は《兎のダンス》を題材として用いたが、子どもたちは曲が古いから興味を持ってないわけではない。これは本研究より明らかである。子どもたちは1曲に対して様々な方向からのアプローチを受けさらに曲に興味を持ち、自然と子どもたちから歌い始める。しかし、それは子どもたちがこれまでどのような経験をしてきたのか、今はどのような時期なのか子どもの実態を把握し、そこから選曲し歌う時の教材や援助方法の検討をしておくことが必要不可欠であると筆者は考える。筆者が行った実践研究はほんの一部である。保育者によって、対象となる子どもによってなど様々なことを考慮していくと、非常に多種多様な保育が生まれると筆者は考える。

このことから今後の課題は、保育者が童謡について知るためにどのような研修や会を求めているのかということをも明らかにし、その結果に基づいてどのようなプログラムを組むのかということも立案することである。保育者自身を知るということは「大正期の童謡」を保育の中で取り入れるためには非常に大切な一歩になると筆者は考える。そして、知るための研修会等の機会があることも重要だろう。大正期の童謡は世代を通じて歌うことのできる貴重なものである。しかし、保育の現場で働く保育者でもまだまだ知らない童謡が多く、知らないから歌えない、歌えないから保育でも扱わない、保育で扱わないから子どもたちは知らないという悪循環になってしまう。保育者がただ歌を知るだけではなく研修会等でその歌の楽しさを知ることができれば、子どもと一緒に歌う時も、保育者がまず楽しさを感じながら歌うことができるため、そこから子どもはその歌に興味をもつ可能性も十分考えられる。保育者から子どもに伝えるだけではなく保育者から子ども、子どもから保護者、または園で保護者が集まる機会に親子で童謡を歌える機会をつくるなど、伝わり方も様々な考えられる。

【謝辞】

鳥取市立賀露保育園には、ご指導やご協力をいただくとともに、お忙しい中にもかかわらず観察調査ならびに実践研究をご快諾いただいたことに深く感謝いたします。

【付記】

本研究は、平成 28 年度 C O C + 「産官学連携共同研究」支援事業の助成を受けた。

本稿は 2016 (平成 28) 年度鳥取大学地域学部卒業論文「鳥取市内公立保育所における童謡の実践に関する研究」の第 3 章に基づいている。

本稿の一部は、日本音楽教育学会中国四国地区例会 (2017 年 2 月、於：エリザベト音楽大学) に於いて口頭発表した。

【注】

- 1 服部公一『童謡はどこへ消えた：子どもたちの音楽手帖』平凡社、2015 年、p. 9。
- 2 鈴木慎一朗「3 章 3 節 わらべうたと童謡の違い」石井玲子編『実践しながら学ぶ子どもの音楽表現』保育出版社、2009 年、p. 54。
- 3 三瓶政一朗編『日本童謡全集』音楽之友社、1974 年。
- 4 2016 (平成 28) 年 5 月から 6 月にかけて、鳥取市立保育所 26 園中、3～5 歳児クラスがある 24 園に郵送にて質問紙調査を依頼した。24 園から回答が得られ、回収率は 100%であった。調査結果については、『教育研究論集』第 8 号、鳥取大学大学教育支援機構教員養成センター、2018 年発行予定に掲載する計画。
- 5 梅澤由紀子「幼児のうたう活動における「音楽的な場」の成り立ち」『愛知教育大学教育実践総合センター紀要』創刊号、愛知教育大学、1998 年、pp.143-148。小杉裕子「一斉歌唱場面における保育者の指導を考える - 豊かな表現活動をめざして」『椋山女学園大学研究論集 人文科学篇』(40)、椋山女学園大学、2009 年、pp.65-74。滝口圭子・迫田里紗「幼稚園年中児クラスにおける歌唱指導：導入部に見受けられる保育者と子どもとのやり取りから」『教育実践研究』(38)、金沢大学、2012 年、pp.45-57。土井田千紘・鈴木慎一朗「幼児期における歌唱の導入方法に関する研究 - 鳥取市内の幼稚園の事例から -」『教育研究論集』第 6 号、2016 年、pp.37-47。中川華那・片山美香「音楽による幼児の表現活動の意義と保育者の援助に関する研究 - 人とかわる力を育むために -」『岡山大学教師教育開発センター紀要』5、岡山大学、2015 年、pp.73-82。小杉裕子・加藤道子・杉江栄子・鈴木文代「歌唱活動に対する保育者の意識と言葉掛け」『椋山女学園大学教育学部紀要』(9)、椋山女学園大学、2016 年、pp.77-87。
- 6 乙部はるひ「保育園における「童謡」の歌われ方」『関東短期大学紀要』51、関東短期大学、2007 年、pp.201-223。
- 7 岡山千賀子・立本千寿子『「季節」と「活用頻度の高さ」を視点とした童謡をいかに幼児に指導するか - 保育園(所)・幼稚園での音楽実践に関するインタビューからの分析-』『徳島文理大学研究紀要』84、徳島文理大学、2012 年、pp.13-22。
- 8 音名は、ドイツ表記。
- 9 付点 8 分音符と 16 分音符のリズムのこと。
- 10 彩樹かれん『うさぎのダンス』ひさかたチャイルド、1998 年。

